

## 平成24年度 自然史博物館活動の評価結果

平成25年6月26日  
群馬県立自然史博物館

### 1 はじめに

本評価は、平成23年度に策定した「活動目標の評価指標表（評価指標）」を用いた内部評価であり、昨年10月16日に公表した平成23年度の博物館活動の評価に続いて2回目となるものである。昨年度同様、本評価結果を今後の博物館活動の改善と充実につなげていきたい。

### 2 評価方法等について

#### (1) 評価指標

今回の評価に当たっては、昨年度末までに、昨年度の評価結果を踏まえた評価指標の見直し（平成24年度目標値の設定、活動目標項目の追加）を行った。

#### (2) 評価作業

今回の評価は、昨年度に続き2回目となることを踏まえ、評価作業は職員8名によるWGが中心となって進め、素案作成後、職員の合同会議に諮り決定するという方法によった。

#### (3) 結果の公表

評価結果については、全職員にフィードバックし、個々の業務改善につなげるほか、HPにて公表し、県有施設としての説明責任を果たすために役立てたい。

※ 博物館活動の評価に至る経緯、自然史博物館の使命と事業方針等は、平成23年度の評価結果を参照してください。

### 3 今後の取組

平成22年度の「魅力ある博物館を語る会」で示された外部評価の導入については、早ければ年度内の実施も視野に、今後、関係機関との調整等を進めていきたい。

### 4 自己評価結果

#### (1) 資料の収集・保存と活用（「未来に伝える博物館」）

採集・寄贈等により収集した資料の合計点数は、目標値を上回った。平成23年度に比べ1,700点ほど減少しているが、これは寄贈点数の変動によるところが大きい。

収集資料のデータベースは、常時サーバで運用されるとともに、定期的に磁気テープでバックアップされている。この磁気テープを万が一の事態に備え、館外での保存を行いたい。

資料は温湿度管理、日常の点検、定期的な燻蒸等により、安全に管理されている。収蔵庫の温湿度は、開館以来運用を続けている空調機器により管理されているが、これらの老朽化が進んでいる。今年度中に実施される ESCO 事業により、空調機器を

更新する際には、資料の保管の観点からも十分に注意し、運用セッティングを決定したい。

収蔵スペースの不足は以前から深刻な問題となっているが、ESCO 事業に伴う空調機器の移設で生ずる空間を倉庫として活用することで、収蔵スペース不足の一部解消が期待できる。しかし、収蔵資料は常に増え続けていくので、これの保管場所についても検討を続けていきたい。

展示での公開やレファレンスによる資料活用は、年度目標をほぼ達成しているが、これに甘んずることなく、より効果的な活用を模索していきたい。

## (2) 調査研究 (「魅力を引き出す博物館」)

調査研究の推進では、昨年度は3年計画で行われる上野村総合学術調査の2年目で、延べ37回(対前年度12回増)の現地調査を行った。また、各職員が個々に行っている調査研究は13分野18研究、外部研究施設等と連携している調査研究は29研究あり、前年度以上の活動を行った。研究成果の公表では、発表論文数19、学会発表数11(対前年度16減)、講演会講座等数29(対前年度15増)など形式の増減はあれ、コンスタントに成果の発表を行ってきたと考えられる。

しかし、調査研究では、研究者や自治体・研究団体との連携による調査研究に比べ、県民との連携による調査研究が少ない傾向は変わらなかった。今後県民が参加しやすい研究テーマの開発と役割分担の組み込みが課題である。また、研究成果の公表や啓蒙という意味では一般向けも含めた講演会・講座の回数は大幅に増加した点は前年度からの改善点といえる。回数等の量的な面のみならず、特別展示や特別解説など、研究成果のタイムリーな公表による意識していきたい。

## (3) 展 示 (「知を広め、高める博物館」)

来館者数は182,038人と過去最高となり目標値170,000人を大幅に上回った。対面式アンケートによって得られたリピーター率も23年度が63%であるのに対して昨年度は67%に伸びている。企画展示の魅力的な内容と様々な媒体による広報活動が功を奏していると思われる。常設展示は開館以来大きな更新はなく老朽化が否めず、展示物が壊されること等もあることから、故障が頻発している。故障時の職員による対応は年間211回で、速やかに対処できる体勢が維持できている。

企画展は常設展にはないテーマを選定し、その時々話題性のある内容で夏、秋、春の年3回、冬には写真展を開催している。昨年度は順に「深海の生物 海底二万里の世界」「キノコとカビのミラクルワールド」「サンゴ ー共生の海 ささえあう生命ー」を開催した。夏は家族連れ、秋は学校団体を、春は家族連れなど一般向け、また季節を意識し展示を行っている。アンケート回答による昨年度の満足度は90%と高い評価を頂いた。予算は減少傾向にあるが、映像撮影・編集、造作物等は可能な限り学芸職員が製作しており、クオリティも向上してきている。冬の写真展はほとんどすべてが職員による手作りである。今後さらにリピーターの方々がまた足を運んでもらえるような魅力ある展示と展示方法の工夫を積み重ねていくことが肝要であり、その努力を継続していきたい。

展示解説アンケートにおける解説業務の満足度は23年度の80%から昨年度は100

%という高い評価を得た。これは解説・接遇研修を15回から27回と大幅に増やしたことにより技量が向上したことが要因として考えられるが、レベルの維持、質の向上に努めたい。

#### (4) 教育普及 (「知を広め、高める博物館」)

学びの魅力を感じられる事業の推進では、実施件数、参加者数ともにほとんどの事業で目標を上回り、参加者の満足度も高い。幼児から団塊の世代まで幅広い対象に応じたメニューを揃え、リピーターに配慮した「昼間の天体観望会」などの新規メニューの開発や「バックヤードツアー 30」などの家族参加型のメニューを工夫した結果だと考える。

サイエンスサタデー以外の普及事業参加者数のみ目標を下回ったことは課題だが、各事業とも参加者の評価は高いので、魅力が伝わる広報活動に努めるとともに参加申し込み方法を簡略化するなどして参加者数の増加に努めたい。

学校教育支援の推進では、課題であった出前授業、館内授業ともに目標を上回った。出前授業強化期間の取り組みや下見対応において館内授業を詳しく紹介したことが成果につながったと考える。

ボランティア活動では、登録者数は昨年並みだが活動人数が減少傾向にあり、高齢化が課題である。友の会活動では会員数が大幅に増加し、活動が活性化する傾向にある。

#### (5) 情報の発信と公開 (「知を広め、高める博物館」)

当館の情報発信の方法は、館外と館内と大きく2つに分けることができる。館外への発信は、ラジオや新聞など色々なメディアを活用したものと、ホームページの充実や月1回のメールマガジンの発行など館自ら発信しているものがある。メディアを利用したものはラジオ等の電波媒体による発信が49件、新聞等の活字媒体による発信が120件であった。ホームページでの新着情報では、1つ1つのイベントに対し事前には募集を兼ねた情報提供を行い、事後には活動内容報告をしている。また、年3回の移動博物館や他館連携出前教室等も博物館の情報を公開する効果的な場である。さらに、高速道路の上里SAやお正月の神社でのPR活動なども行った。

#### (6) シンクタンクとしての社会貢献 (「知を広め、高める博物館」)

公共の博物館として、その有する様々な資源(資料、情報及び職員の専門性)を活用し、自治体や各種団体への専門知識の提供や講師の派遣など、シンクタンクとしての機能を充実させ社会貢献を果たすことは博物館の重要な使命の一つである。

今年度から実績を集約したものは3項目ある。そのうち、レファレンス利用者の拡大は目標値200件/年に対して246件/年と目標値を越えることができた。これまで専門性を求めるニーズへの対応を心がけてきた結果であると考えられる。学会・博物館関連団体の委員等を除く、自治体やその他の機関・団体の委員会の委員等として16件(昨年度13件)を受諾し、学校を除く機関・団体への専門性を生かした講師派遣数は34件(昨年度25件)といずれも目標を大きく上回る結果であった。また、他の博物館等への資料の貸出件数は25件と増加傾向にあった。これらの実績数は、いず

れも増加傾向にあり、少ない職員数のなか健闘できたと考えられる。課題としては、大学教育への講義・実習等の回数の減少、博物館施設等との連携事業等の減少がある。大学や他の博物館との連携は、専門性を高められる場でもあり、次年度以降、どのような形で寄与できるか検討する必要がある。

#### (7) マネージメント (経営)

安全で利用しやすい博物館施設への改善では、昨年同様、点字・外国語表記等が課題であるが予算的な制約から進展が見込めない状況である。観覧者サービスの点検と質的向上では、案内業務のクオリティチェックと接客研修を継続することで、一定の水準の確保を図っているが、更なる向上を目指したい。

博物館の認知度の向上と利用者層の拡大では、新規事業の実施や連携事業の拡充などを行い入館者増に役だっているものと考えられる。

職員の意識改革と資質の向上では、研修会・学会等への参加が少ないが、予算上の制約も大きいため、必要な予算確保に努めたい。博物館の事業は長年継続しているものが多いことからマンネリ化の危険があり、積極的な取組を呼びかけていきたい。

博物館支援組織のあり方の検討は進んでおらず、重要な課題として検討を進めたい。博物館活動への理解及び外部協力の確保は、景気動向等から難しいが、予算確保や企業からの協力の増加の努力を続けたい。

防災意識の向上と危機管理体制の強化では、危機管理マニュアルの作成し地震を含む2度の訓練を行った。今後はマニュアルをより実効性のあるものとしていきたい。

博物館評価システムの構築では、初めての評価を行いHPで公開した。今後は評価の活用と外部評価の導入に向けた取り組みを進めたい。